

京都大霊長類研究所教授 高田 昌彦さん(64) 脳神経科学

誰にとつても身近でありながら、現代科学最大の謎と言われる「脳」。その解明に生涯を懸けてきた。人を含む動物が行動する時、脳内ではどのようなネットワークが活性化しているのか。大脳基底核という部位を中心とした神経回路の働きを、ニホンザルやマーモセットといった霊長類を使って研究している。

大脳基底核中心に神経回路を研究



「1回だけの挑戦」という約束で法学部を受験した。英語があつた。しかし入試は失敗。1浪して、

広島大歯学部に進んだ。ただ、歯科医として臨床に進むつもりにはなれず、自然と研究者としての道を意識するようになった。「英語



ミスが導いた生涯のテーマ

が得意だったので、論文を読むのが苦にならないのも大きかった」と振り返る。当時、京都大の水野昇教授が広島大で講義を持っていた。水野教

た。ネコの脳の特定部位を観察する際、誤って狙いとは異なる「線条体」という部分に標識物質を注入してしまったのだ。その結果、大脳基底核

から京大霊長類研究所の教授を務めている。大脳基底核が病態に関わるパーキンソン病の研究をサルで行うほか、近年はマーモセットを使

授が京大で構える解剖学研究室に出入りするようになり、大学院もそこへ進んだ。広島大でマウスを使って味覚の研究をしていたこともあり、脳への関心は早くから持っていた。大学院で研究を始めた当初、「その後の研究者人生を決めるミス」を起こし

の中心である線条体にはかの脳の部位から神経回路が伸びていることが分かった。視覚情報と運動制御の関わりを示唆する成果だった。「ミスのおかげで生涯のテーマに出会った」

その後、米テネシー大の助教授などを経て、2009年

本年度で定年だが、まだ研究したいことはたくさんある。論文で自分の研究の意義を表現し、論理的な構成を考えるのが何より楽しい。「理解してもらいやすい文章を考える時間が好き。発表する論文は一つのアート作品と思っている」と語る。「永遠のブ

ラックボックス」と言われる脳は、自身にとつての創造の源泉となっている。(広瀬一隆)